

主体的に運動に親しみ，自ら考え，工夫する力を育てる授業づくり
～ ソフトバレーボールにおける学び合いを通して ～



那覇市立天妃小学校教諭
赤嶺 栄達

目次

I	テーマ設定の理由	15
II	研究目標	16
III	研究仮説	16
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	16
V	研究内容	17
	1 主体的に運動に親しむとは	
	(1)運動意欲	
	(2)運動の楽しさ	
	2 課題解決にむけた学習について	
	(1)学習過程の工夫	
VI	授業実践	21
	1 指導計画	
	2 本時の指導	
	(1) 目標	
	(2) 授業仮説	
	(3) 本時の展開	
	(4) 評価	
VII	結果と考察	24
VIII	研究の成果と課題	26
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献と資料》

《分析協力》

【参考資料】

主体的に運動に親しみ、自ら考え、工夫する力を育てる授業づくり ～ ソフトバレーボールにおける学び合いを通して ～

那覇市立天妃小学校 赤嶺 栄達

I 研究テーマ設定理由

社会の急激な変化に伴い、子どもたちの身体活動の減少、体力・運動能力の低下、積極的に運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向が指摘されている。新学習指導要領の体育科の目標には、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」とあり、生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくためには、小学校段階において、その基礎を確実に育成することが重要であることを強調したものである。また、各運動領域の内容については、子ども達に身に付けさせたい内容を明確にする視点から、基本的に「技能（運動）」、「態度」、「思考・判断」で構成され、特に「技能」については、運動の楽しさや喜びを味わわせながら身に付けることが重視されている。さらに、これからの体育学習においても他教科同様、習得した知識・技能の活用が図られる学習活動を充実することが求められ、自ら考え、工夫しながら運動の課題を解決する等の学習過程の工夫が必要とされている。

全国的に子どもの体力・運動能力の低下が懸念される中、全国体力・運動能力、運動習慣調査が小学校では5学年を対象に毎年行われている。平成21年度の調査結果では、週に1～2回以上運動している児童全体の割合は、沖縄県80.0%（全国85.9%）であるのに対し、本校は76.0%と低い結果であった。運動クラブの所属についても、沖縄県56.4%（全国60.4%）に対し、本校は37.8%とかなり低い割合であった。これは、普段の生活の中で子ども達が運動に親しむ機会や身体活動が少ないということの実態の現れで、課題として捉えることができる。その解決に向け、子ども達に日常的に運動、遊び等を通して体を動かす意識を持たせ、指導の工夫・改善をしていく必要がある。このような状況の中で、運動に親しませる機会としての学校体育の果たす役割は大きい。

これまでの体育の実践を振り返って見ると、基礎的な技能を習得するためのめあての設定、学習資料の活用、教え合い等に課題が多く、子どもたち一人一人に意欲をもたせ、課題を解決させるには十分ではなかったこと、また、技能面での個人差によって苦手な子に運動の楽しさや喜びを味わうことができないことが多かったように思える。体育の授業で取り上げられている球技の中でも、ソフトバレーボールは、攻守がはっきりと分かれ、仲間と励まし合い、協力し合って運動に親しむことができる運動であり、運動の楽しさ（動く楽しさ・集う楽しさ・伸びる楽しさ・わかる楽しさ）を十分に味わえる競技だと考える。体育の授業の中で、仲間と楽しく運動すること、課題の解決、技能の高まり等から生まれる楽しさや喜びは次の運動への意欲へとつながる。それが、体育科の目標である「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる」また、「健康の保持増進と体力の向上」へと結びつくものだと考える。

そこで、本研究では、ソフトバレーボールを通して課題を解決する学習過程を工夫し、友達と学び合うことで学習意欲が高まり、自ら進んで運動に親しむことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

主体的に運動に親しみ、自ら考え、工夫する力を育てるために、学習過程を工夫し課題の解決にむけた学習指導方法を研究する。

III 研究仮説

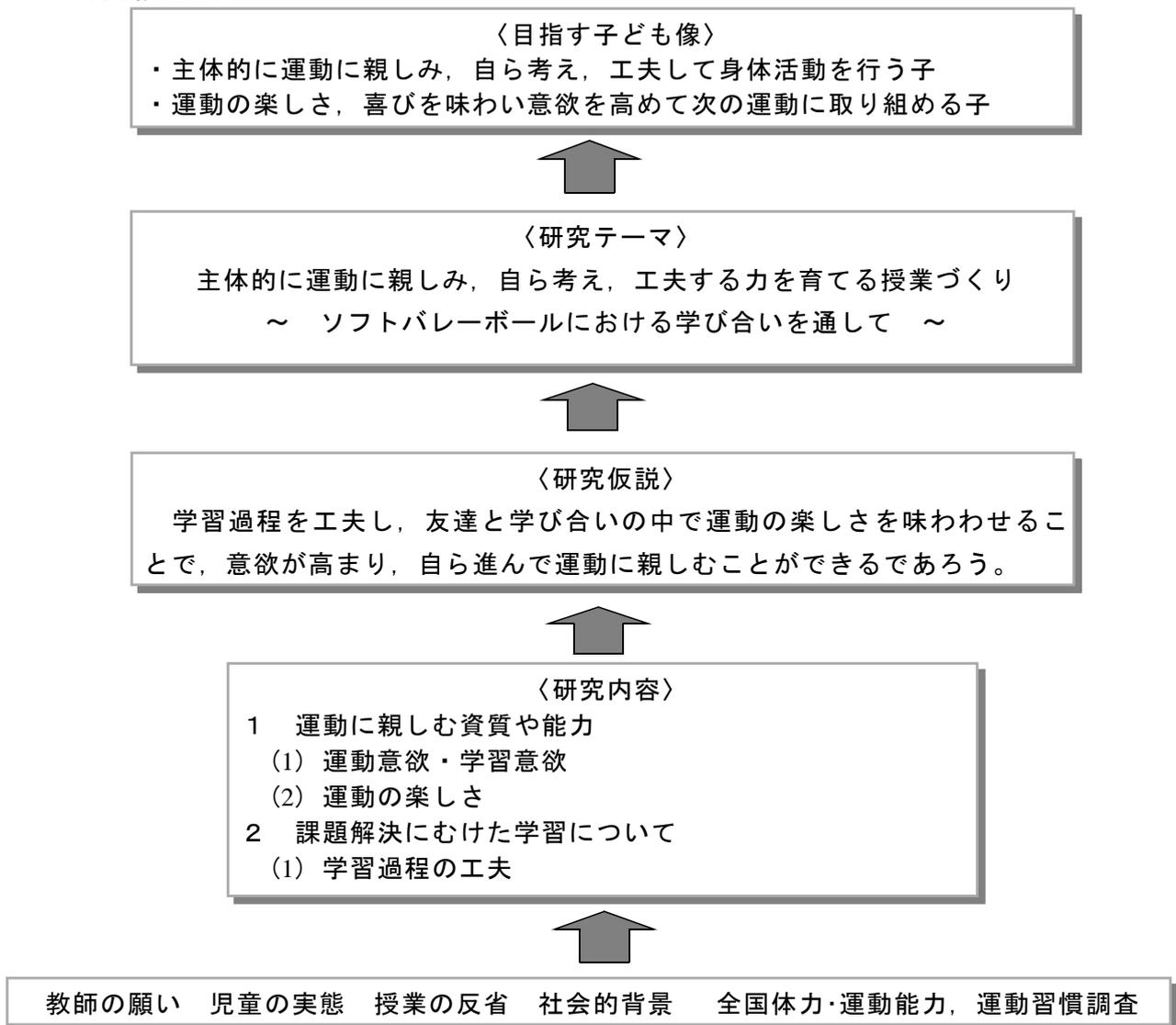
1 基本仮説

学習過程を工夫し、友達との学び合いの中で運動の楽しさを味わわせることで、意欲が高まり、自ら進んで運動に親しむことができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 運動の楽しさを友達と共有できるような学習課程を工夫することで、運動する楽しさを味わい、学習意欲が高まるであろう。
- (2) 個人やチームの課題をつかみ、解決のために自ら考え、工夫させることで主体性が高まり進んで運動に親しむことができるであろう。

IV 研究構想図



V 研究内容

1 「主体的に運動に親しむ」とは

《 体育科の目標 》

心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。

ここで示された「運動に親しむ資質や能力」とは、運動への関心や自ら運動をする意欲、仲間と仲よく運動すること、各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力、運動の技能などを指している。また、この目標にある「運動に親しむ」を考えると以前の学習指導要領までは「運動に親しませる態度」と示され、児童に運動の楽しさや喜びを十分に味わわせ、生涯にわたって自ら進んで運動を実践できるようにすることを目指したものである。このことは運動の楽しさや喜びを児童一人ひとりのものとし、「楽しい」ということが自発性、自主性を引き出し、そのことが日常生活における運動の継続につながり生涯にわたって運動を実践する態度へと発展するという考え方に基づいて強調されたものである。

(1) 学習意欲・運動意欲

新学習指導要領の改訂では、基礎的・基本的な知識の習得、思考力・判断力・表現力とともに学習意欲の向上が重要とされた。全国的に体力の低下傾向が問題になっていることや積極的に運動する子どもとそうでない子の二極化への指摘があることから、体育科においては「運動の楽しさや喜び」を味わわせ、運動意欲の向上を図り、生涯にわたって運動に親しむ態度を育てなければならない。学習活動を支える大きな要因は意欲である。子ども達が主体的に運動するには一人一人に運動の意義を理解させ、意欲を高める授業の工夫をしなければならない。それには、まず初めに子どもの実態、意欲の方向を知る必要がある。体育学習における運動意欲については様々な研究がされてきているが、伊藤（2001）は次のようにあげている。

- 充実志向・・・体育の授業や学習自体がおもしろいから
- 実用志向・・・体育で健康や体力を高めることを通して将来の健康に生かしたいから
- 優越志向・・・体育で友達に勝ちたい、友達より上手になりたいから
- 承認志向・・・先生や友達から注目されたい、認められたいから
- 集団志向・・・体育の学習を仲間と楽しみたいから
- 成績志向・・・体育で悪い成績をとりたくないから

これらのことから、体育に対する学習意欲は、充実志向や実用志向といった内発的学習意欲から、優越志向や承認志向といった外発的学習意欲まで含んでおり、多様であることが言える。体育の授業づくりを考えると、子ども達一人一人のもつ学習意欲の質や方向を教師が知っておくことは重要であり、それを授業の中に生かしていかなければならない。子ども達が意欲をもって運動できる学習の中では、一人一人が運動のもつ楽しさや喜びを味わうことができ、さらに次の運動への意欲付けにもつながる。その意欲がエネルギーと

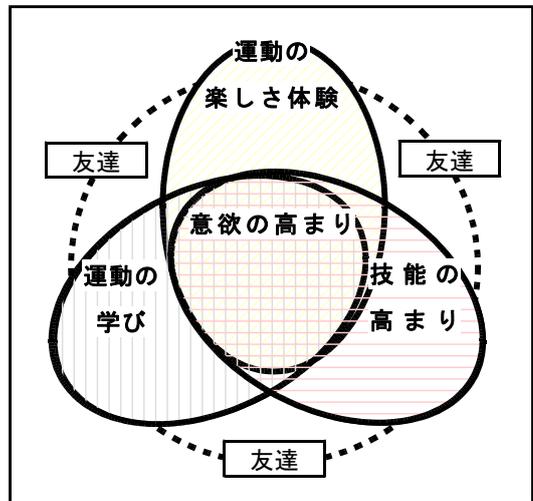
なって動きや技能の高まり，記録の伸びに結びつく。また，友達と運動を共にする中で自分なりに考え，工夫して運動ができるようになり，次の運動，技能の習得へと動きの高まりを目指すようになる。

このような運動意欲の高まりは，図1に示すように運動の楽しさ体験，動きや技能，学びと大きく関わっていると考えられる。また，友達と活動を共にし楽しさを共有することで学習意欲は高まり，次の運動を求めていくものだと考える。

本研究では，子どものもつ意欲の方向を調べ，児童の実態にあった学習過程を工夫し，子ども達の運動意欲を大切にしながら高めていくようにしたい。また，授業の前後で西田(1989)作成の体育における学習意欲検査（以下 AMPET と記す）を使って意欲の高まりについて調査する。

AMPET の下位尺度は，体育学習を促進させる意欲側面（学習ストラテジー，困難の克服，学習の規範的態度，運動の有能感，学習の価値）と体育学習を制御する回避的側面（緊張性不安，失敗不安）との2つに分けられ，それぞれの総合得点で測定する。下位尺度が示す内容は次の通りである。

図1 学習意欲の高まりとその関わり



【学習ストラテジー】

体育学習を効率よく行うためのうまくできる方法や手段をいろいろと考えたり，実行したりする程度を示す。

【困難の克服】

人よりもうまく運動できるようになろうとして黙々と練習を続けたり，たとえうまくできなくても最後までがんばるといった特性を示す。

【学習の規範的態度】

先生や指導者の話をきちんとまじめに聞いているか，うまくなるために必要な指導や助言を素直に受け入れているか，ルールやきまりなどをきちんと守っているか，といった体育学習での規範的な態度を示す。

【運動の有能感】

運動に対する自信や有能感に関連し，人よりも運動がよくできると認知している程度を示す。

【学習の価値】

運動がよくできるということに対する価値観や目的意識，学習することの必要性などを示す。

【緊張性不安】

人前で運動するような時に，どの程度緊張したりあがったりしているかを示す。

【失敗不安】

人に負けるのではないかと，試合で失敗するのではないかとといった失敗や負けることへの不安や恐れを示す。

(2) 運動の楽しさ

体育科の目標にある「運動の楽しさや喜びを味わわせる」が強調されたのは，昭和 53 年告示の学習指導要領からである。前述したように運動の楽しさ体験が学習意欲と大きく関わり，次への運動，生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践していくための基礎を培うことになる。小学校段階においては，各種の運動をまず好きになることとの関連で捉え，運動の得手，不得手にかかわらず，すべての児童が運動の楽しさや喜びを求める学習

指導を優先させなければならない。しかし、「運動の楽しさや喜び」を味わわせるための「楽しい体育の授業」は、子ども達を好きなように遊ばせたり、運動させたりするものではない。「楽しい体育」とは、どんな体育であるか高田(1982)は次のように述べている。

○動く楽しさ……子どもにとって動くことは何よりも楽しいことであり、健康である限り欠くことのできない運動の喜びを指す。

○集う楽しさ……子どもの発達において児童期特有の仲間作りの楽しさ、仲間と一緒に活動する楽しさを指す。

○伸びる楽しさ……「進歩する楽しさ」、「前進する楽しさ」を言い、技や力が伸びることを指す。

○わかる楽しさ……「何かを追求する楽しさ」、「何かを発見する楽しさ」、「何かを知る楽しさ」であり、「学ぶ楽しさ」を指す。

今回の指導要領の改訂で、各運動領域の内容については、子ども達に身に付けさせたい内容を明確にする視点から、「技能」については、運動の楽しさや喜びを味わわせながら身に付けることを強調している。子どもが求める楽しさを味わわせながら、単元の特性に応じた基礎・基本の習得を図り、活用する学習活動を工夫しなければならないと考える。

本研究では、児童が自ら考え、工夫し、主体的に運動に取り組むことができるように、楽しみながら動きや技能を高める活動、チームワークを育む活動に視点を当てていきたい。

2 課題解決に向けた学習について

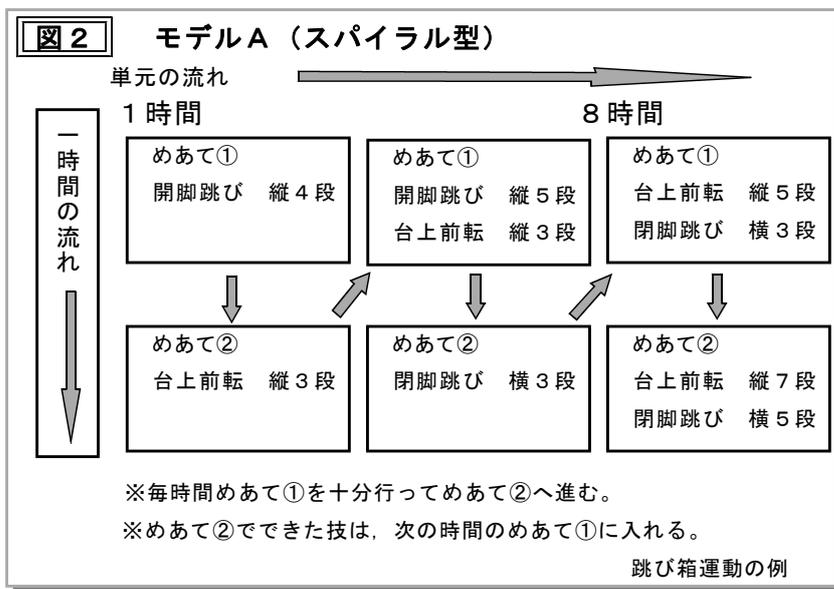
(1) 学習過程の工夫

学習過程とはある単元の学習を進める上で、学習のねらいを達成するための学習の道筋であり、ねらいに近づくための学習のステップを示したものである。平成3年に文部省は、一人一人に運動の楽しさや喜びを味わわせる体育学習の中で、学習過程の工夫とめあてのもたせ方としてモデルA(図2)、モデルB(図3)を提示した。

① 学習過程のモデルA(スパイラル型)

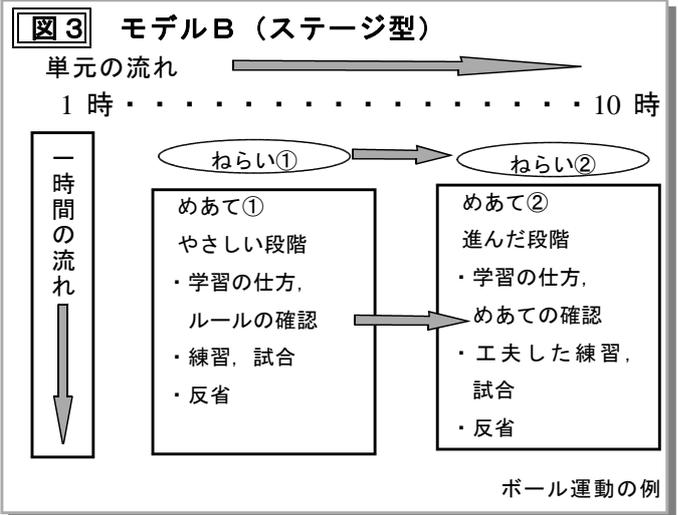
「今もっている自分の力でできることで運動の楽しさや喜びを十分に味わい」、その活動を土台に、「創意・工夫、努力を加えて新しいこと、難しいことへ挑戦をする」という手順を歩むことである。この二つの段階が毎時間(あるいはできるだけ短いサイクルで)確保されることが学習意欲を高めるのに重要な意味をもつと考えられる。右の図は跳び箱運動を例にした時の単元の流れである。

図2, 3『小学校 体育指導資料 指導計画の作成と学習指導』より



② 学習過程のモデルB（ステージ型）

「今の力を十分に生かして、特性を求める学習」の段階から、「創意・工夫、努力を加えて特性を求める学習」の段階へとゆっくりと進めることとなる。「できることで十分に特性に触れ」、そこで培われた力や新しく身に付いた力を使って、「できそうなことに挑戦し、さらに特性を求める」という学習である。右の図3はボール運動を例にした時の単元の流れである。

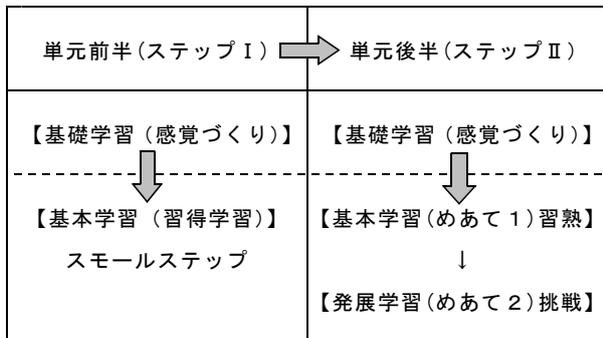


次に、新学習指導要領では、学習内容を具体的に示し、運動領域では次の主な改善点を挙げ、確実な習得をめざしている。

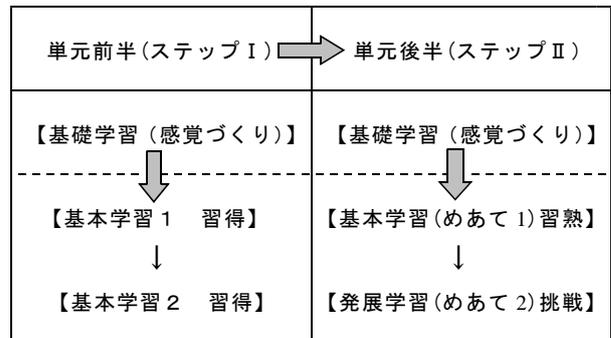
- 各運動領域の学習内容が明確にされた。
- 学習内容の確実な習得を保証するために、低・中・高にわけ、いずれかの学年で運動を取り上げるよう弾力化を図った。
- 子どもの体力の低下、二極化傾向に歯止めをかけるため、授業時数の増加、これまで高学年で行われていた体づくり運動が低学年段階から導入された。
- ボール運動が「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」で示された。

今回の改訂では、運動の楽しさや喜びを味わわせながら基礎的・基本的な運動を身に付けることが強調され、『学習指導要領の解説と展開（教育出版）』の中で次のような習得学習を大切にしたい学習過程の工夫が提案されている。

はじめての段階の学習過程のモデル



はじめての段階および少し進んだ学習過程のモデル



これまでの学習指導要領では、「学び方」が重視され、モデルA（スパイラル型）、モデルB（ステージ型）でめあて学習が取り入れられてきた。しかし、個々の能力とめあてが合っていない、教師側が子どものめあてを十分把握できていない等の反省もあり、より確実な学習内容の定着が図れるよう基礎、基本、発展の学習の工夫が必要とされてきた。これまでモデルA、モデルBで行われてきた「めあて学習」、今回提案されたモデルにおいて、ステップを踏んで次の学習に進むという点では共通しているといえる。それに加え、めあて学習における「目標→課題→活動方法の選択」の考え方は、学習者が問題を解決するためには大切な考え方であり、これからも「学び方」に視点を置き、子ども自身が工夫し、めあてを自己決定していく活動を学習の中で大切にしていかなければならないと考え

る。しかし、子ども達が自分の課題を解決するための学習はすぐに身につくものではない。そこには、教師が子どもに、楽しみを味わえる活動、楽しみながら解決する手がかりを示すことが必要だと考える。また、はじめの段階では、全体が共通して活動する中で基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、次に、個々、または、各グループでの活動の場面での活用、課題の解決に向けた学習のバランスのとれた学習過程の工夫が必要である。また、学習内容、児童の実態を十分考慮し、運動の楽しさや喜びを味わわせながら、「習得」「活用」のそれぞれの学びが展開される学習の進め方を工夫していくことが求められている。

本研究では、モデルB（ステージ型）を基本として、単元の前半（2時～4時）はチーム内での課題発見・解決の場面、後半（5時～7時）はチームで学び合ってきたことを活かし、他チームと交流することで、さらに活動が広がり、深まるようにした。また、毎時の授業のはじめに、技能の向上や課題解決に向けてのヒントにつながる一斉での基礎的・基本的な知識や技能の習得の時間を入れ、技能の向上を図れるようにした。単元の後半では一斉の時間を徐々に減らしながら友達やグループでの練習、試合前後の話し合いを取り入れ、「活用」の段階へステップアップできる学習過程を工夫し、子ども達が自ら考え、工夫して活動できるような指導計画をたてた。

VI 授業実践(第5学年)

1 指導計画

単元の流れ 全8時間

		前半				後半			
時間		1	2	3	4	5	6(本時)	7	8
10分	オリエンテーション 学習の進め方 VTR視聴 ルールの確認等	準備運動・今日の学習の流れ・めあての確認 基本の運動							
20分							ゲーム1 習得 ↔ 活用		
30分		ゲーム 課題発見	基礎技能の習得 話し合い	基礎技能の習得 話し合い	基礎技能の習得 話し合い		話し合い	課題解決	ゲーム 習得 ↑ 活用
40分			ゲーム 習得・活用 課題発見	ゲーム 習得・活用 課題発見	ゲーム 習得・活用 課題発見		ゲーム2 習得 ↔ 活用		
		○チームミーティング				自己評価・相互評価		まとめ	

※単元の前半2時～4時をグループ内活動、後半5時～7時を他グループとの活動で課題解決を目指す。

※授業の前半の一斉での活動を徐々に減らしていき、子ども達が主体的に活動できるようにする。

2 本時の指導

(1) 目標 自分たちに合った練習の方法を考え、練習、ゲームを楽しむ。

(2) 授業仮説

課題解決に合った学習方法を考えさせることで、学び方が身につき自ら進んで運動に親しむことができるであろう。

(3) 本時の展開 (6/8)

時間	学 習 活 動	教師の支援	評 価
導 入 (13 分)	<p>☆準備運動 (各自で)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 用具の準備, 安全確認をする。 2. 今日の学習の流れを理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ・めあてを決める。 個人のめあて→チームのめあて <p>4. 基本の運動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ターンキャッチ ・トス&パス ・ボールリフティング 等 ・グループごとに分かれ, 広がって活動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の場の安全やけがの防止について心がけさせる。 ・前時までの活動をふり返り, チームのめあて, 一人一人のめあてをもたせるとともに伸びの見えるチームを賞賛し, 意欲を高める。 ・チーム内で声をかけ合い, 協力して取り組むように助言する。 ・バレーボールの動きとつながりがあることをしっかり捉えさせる。 ・苦手な子には, ボールを換える, あわてずに動く等助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割を分担してめあてをもって取り組もうとしている。 【関・意・態】 ・自分に合っためあてを立てているか。【思・判】 ・進んで運動に取り組むようにしている。 【関・意・態】
展 開 (25 分)	<p>5. ゲーム1 (チーム課題見つけ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チームや自分の力を確かめながらゲームを楽しむ。 ・ルールを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>【ルールの変更例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サーブをする場所は前の線からでもいい。 ・ワンバウンドではいけない。 ・3回以上さわって返す。 </div> <p>6. 話し合い (作戦タイム・相手チームと話し合い)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで作戦を立てる。 ・自分たちの課題から, 試合に勝つための作戦を立てる。 ・ゲームからわかった課題を解決する練習方法を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんながボールに触れるよう確認をする。 ・ワンマンプレーがある場合は, 声かけをする。 ・ルール, マナーの確認をする。 ・これまでにやってきた練習から自分たちにあった練習方法を選ばせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のチームに合った作戦を立てたり, ルールを選んだりしている。【思・判】 <p>※【仮説検証】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いに参加している。 【関・意・態】 ・教師や友達の助言, 学習資料を活用している。

<p>展 開 （ 25 分 ）</p>	<p>【予想される練習内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム内での打ち合い ・サーブ，パスの練習 ・円陣パス ・強いボールを打つ，受ける練習  <p>7. 課題解決にむけた活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちに合った練習方法を選び，自分たちで考えて，自分たちなりに練習を工夫する。 ・各グループに分かれて練習する。 <p>【予想される練習内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム内での打ち合い ・サーブ，パスの練習 ・円陣パス ・強いボールを打つ，受ける練習 <p>8. ゲーム2</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手チームとルールを確認する。 ・チームに合った作戦やルールを考えてゲームを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達の実態とゲームのルールや場が合っているか確認する。 ・ボールに対してすばやく移動できない，うまくパスできないなど個の課題解決に合った練習方法を示す。 ・みんながもっと楽しむためにはどうしたらよいか考えさせる。 ・課題にそった練習ができているか確認，助言し練習が活発になるようにする。 ・負けの多いチームの練習を中心に観察し，良い点をほめることで自信，意欲をもたせる。 	<p>【思・判】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決に向けて自分たちに合った練習方法を選び，練習することができる。 <p>【思・判】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師や友達の助言，学習資料を活用している。 <p>【思・判】</p> <p>※【仮説検証】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・状況に応じたボール操作ができる。 【技能】
<p>終 末 （ 7 分 ）</p>	<p>8. 本時のまとめ，ふり返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループの良かった点を話し合う。 ・自分たちで考え，工夫し，楽しく活動ができたかふり返る。 ・次時の確認 ・あいさつ，片付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の良かった点をみんなに紹介し，次へのめあてをもたせ，意欲を高める。 ・自己・相互評価にまとめさせ，次時へとつなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己・相互評価ができる。 <p>【関・意・態】</p>

(4) 評価

課題解決に合った学習方法を考えさせることで，学び方が身につき自ら進んで運動に親しむことができたか。

Ⅶ 結果と考察

【検証 1】

運動の楽しさを友達と共有できるような学習を工夫することで運動する楽しさを味わい、学習意欲が高まるだろう。

【結果】

資料 1 は、西田(1989)の作成した「体育における学習意欲検査 (AMPET)」を使って学習意欲について調査した結果である。下位尺度である学習ストラテジー、困難の克服、運動の規範的態度、運動の有能感、学習の価値の合計点で求められた意欲的側面の合計得点を比較すると、授業後が授業前より 4 ポイント高くなった。これに対し、緊張、不安などを示す「回避的側面」では、授業後に 2.5 ポイント低くなった。

資料 2 は、「ソフトバレーボールに興味をもって活動できるか」の質問の結果である。「ある」「少しある」の合算は、授業後には 92.9% と授業前と比べて 32.2 ポイント高くなった。

資料 3 は、「ソフトバレーボールの授業に進んで取り組めるか」の質問の結果である。

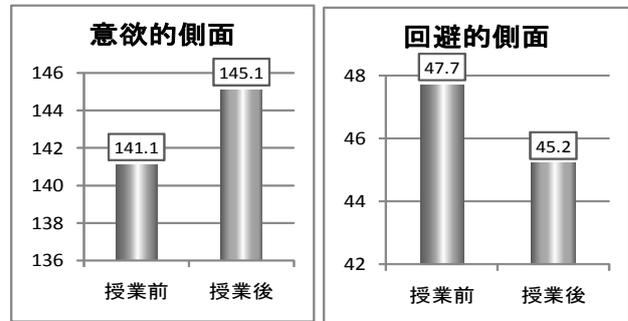
「進んで取り組める」「取り組める」の合算は授業後に 28.6 ポイント高くなった。

【考察】

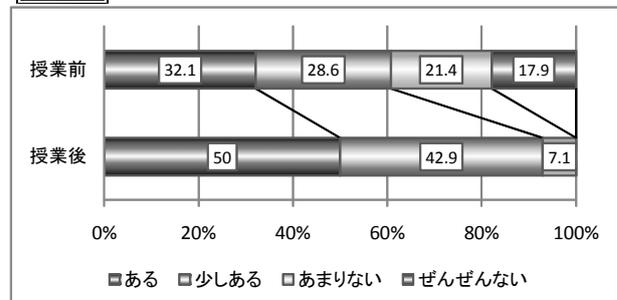
授業前のアンケート調査で、子どもたちが授業に対し期待している点（意欲の方向）としては、「うまくなりたい」57.1%、「ルールやマナーをみんなが守る」46.4%、「ルールを知りたい」・「ゲームがしたい」が 35.7%と多かったが、中には、「おもしろくない」、「楽しくない」、「ルールがわからない」という理由で興味がない、進んで取り組めないと答えた児童も多かった。そこで、オリエンテーションの中で、ビデオ視聴を通して、ルールの確認、技や動きをイメージさせるとともに、授業の見通しをもたせ、約束事についての確認をし、興味を持たせるようにした。また、毎時間の授業の導入にバレーボールの技能に

関連する基本の運動（コーディネーション運動：東根）をとり入れ、運動の楽しさ（動く・集う・伸びる・わかる）を友達と共有できるようにし、期待感・興味を持たせるようにした。そ

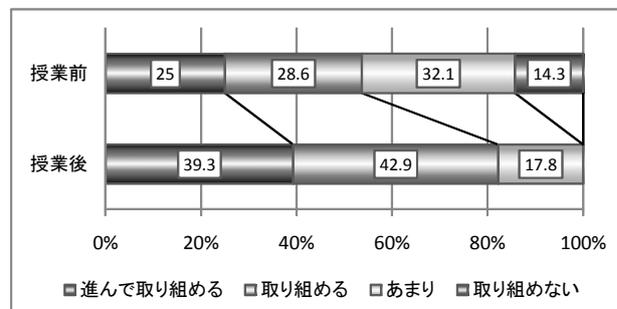
資料 1 体育における学習意欲検査



資料 2 「興味をもって活動できるか」



資料 3 「進んで取り組めるか」



資料 4 授業後の児童の感想

チームワークが良くなって楽しくソフトバレーができたので楽しかったです。
レシーブやスパイクいろんなプレーも楽しくできたりしたのでよかったです。
声をかけたり、ほめられたりもできたのですごくよかったなと思いました。
また、ソフトバレーをやりたいです。

の結果として、「興味をもてた」「進んで取り組めた」という児童が多くなったことは、友達同士で関わりながら基本の動きや主運動、話し合いに取り組ませたことが意欲の向上につながったと考える。また、違う重さのボールの中から自分にあったボールを選ばせたこと、基本のルールを話し合いによって変更を可能とし、ゲームでのルールや、ネットの高さ、コートの方さなどを自分達で決定することができたことも「興味をもつ」「進んで取り組む」など意欲を高めた要因であったと考える。資料4の児童の感想にあるように友達やチームでラリーを楽しむ等、運動の楽しさを共有することで学習意欲（意欲的側面）が高まり、声をかけ合い、励まし合いながら活動できたことで、授業後に緊張や不安等の回避的側面が低くなったのだと考える。

【検証2】

個人やチームの課題をつかみ、解決のために自ら考え、工夫させることで主体性が高まり進んで運動に親しむことができるであろう。

【結果】

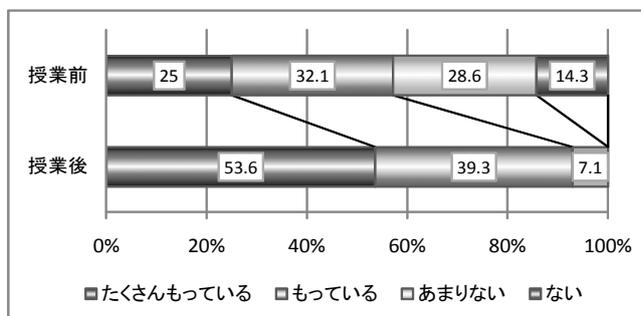
資料5は授業前後の「ソフトバレーボールの授業で目標・課題をもっていますか」の結果である。「たくさんある」「ある」の合算は授業後に 92.9%となり、35.8ポイント高くなった。

資料6は AMPET の意欲側面の下位尺度得点の変化である。そのうち、困難の克服、規範的学習態度、学習の価値においては統計的にも有意といえる上昇を示した。学習ストラテジー、運動の有能感においては授業後に低くなる結果であったが、資料8の授業前後のアンケートでは、「うまくなるために考えたり、工夫したりして練習することが出来ますか」の質問に対し、「できる」「少しできる」の合算は授業後に 13.3ポイント高くなった。また、「ソフトバレーボールがうまくなったと思いますか」の質問に対し、85.7%の児童が「そう思う」「少し思う」と答えている。

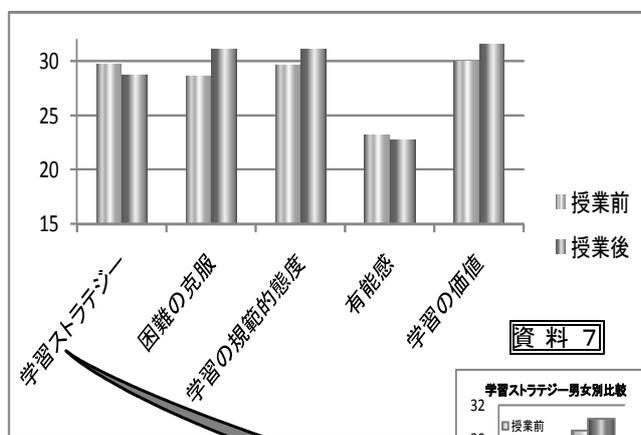
【考察】

資料5を見ると、ほとんどの児童が目標・課題（めあて）をもって活動していたことがわかる。これは、毎時間、次の活動へつなげる自己評価を書かせることで、各自めあてをもつことができたと考えられる。また、指導計画の中にバレーボールの動きにつながる基本の運動、基礎的・基本的な技能の習得、グループの話し合いの時間を入れたことや、ボールを落とさないために一つ一つの動きをどうすればいいか考えさせる場面を意識して取り入れ、チームワークや技能の向上を図った。それが、自分の目標・課題を自分なりに考え、練習し技能の習得につながったと考える。

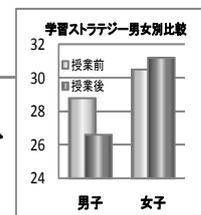
資料5 「目標・課題をもっていますか」



資料6 AMPET 各下位尺度得点の変化



資料7



男女別比較

さらに、資料6の AMPET の下位尺度の「困難の克服」「学習の規範的態度」「学習の価値」が授業後調査で高くなったことは、体育の授業において約束事をきちんと守り、運動の技能習得のためにあきらめずに頑張ったという充実感が表れた結果だと考えられる。また、この充実感は、「練習すればできるようになる」「運動することは大切なんだ」と体育（運動）に対する必要性を感じることもつながっている。資料9の児童の感想には主体的に運動に取り組む姿勢が身に付き、学習活動が高まったことが記述されている。しかし、これに対し、「学習ストラテジー」、「運動の有能感」には高まりが見られなかった。

「学習ストラテジー」について男女別に見ると、授業後に女子には高まりが見られたが、男子は低くなっている（資料7）。

アンケートで「友達との教え合い」が良かったと女子のほとんどが回答しているのに対し、男子には少なかった。これは、女子は、技能習得のためにお互いに教え合ったり、資料を活用したりしたのに対し、男子は、上手な人をまねたり、参考にしたりすることが少なく、「ゲームがしたい」「ゲームで試したい」とゲーム中心の活動をしていたことがその要因だと考えられる。今後、男女差、個人差をより把握し、実態に合わせた支援を行い、課題の解決に向けた学習に取り組ませたい。

「運動の有能感」については、「人よりも」と友達と比べる質問内容であったために、「友達と比べると上手ではない」「自信がない」と感じていることが「運動の有能感」の低下につながったと考えられる。しかし、アンケートや自己評価で「上手になった」「考えて、工夫して練習した」と評価している児童が多いことから、自己の高まりを実感することができ、自ら進んで活動できたと考える。

VIII 研究の成果と課題

1 成果

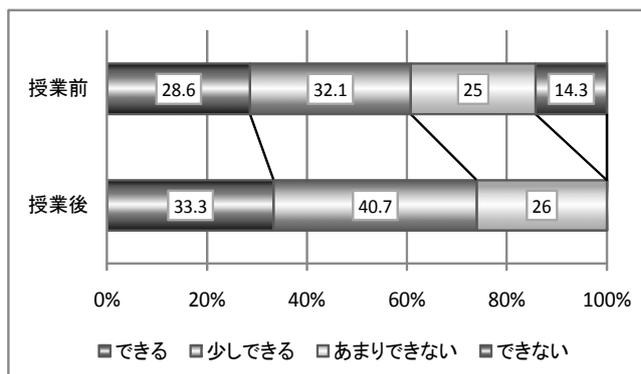
- (1) 運動の楽しさを友達と共有できる学習を工夫することで、運動の楽しさを実感する児童が増え、その結果、学習意欲が高まった。
- (2) 個人やチームの課題をつかみ、解決のために自ら考え、工夫させることで主体性が高まり自ら進んで運動に親しむことができた。

2 課題

- (1) 運動の楽しさや喜びを味わわせ、次の運動への意欲へとつなげるための継続的、日常的な指導。

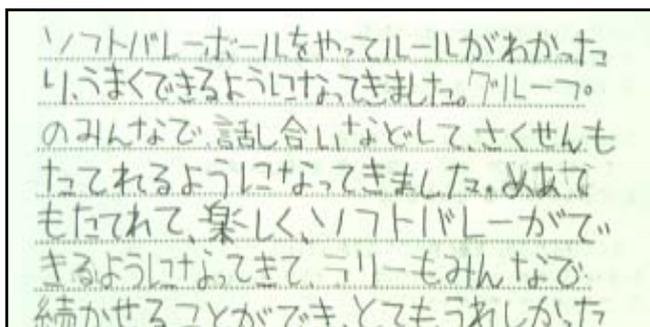
資料8

「考え、工夫して練習できる」



資料9

授業後の児童の感想



(2) 個人のめあてとチームのめあてをどのようにつなげ、設定していくか、また、子ども達が主体的に活動し、課題解決に向かう教師の支援のあり方。

《主な参考文献と資料》

- 『小学校 体育指導資料 新しい学力観に立つ体育科の授業の工夫』 文部省 1995 年
『小学校 体育指導資料 指導計画の作成と学習指導』 文部省 1991 年
『小学校体育「めあて学習」の進め方』 杉山重利 細江文利 池田延行編著 東洋館出版社 1997 年
『体育授業の心理学』 市村操一 阪田尚彦 賀川昌明 松田泰定編著 大修館書店 2002 年
『小学校学習指導要領の解説と展開 体育編』 高橋健夫 野津有司編著 安彦忠彦監修 教育出版 2008 年
『体育授業研究 15 楽しい体育を目指して授業をどう改善するか』 明治図書 1982 年
『期待・感情モデルによる 体育における学習意欲の喚起に関する研究』 西田 保著 杏林書院 2004 年
『子どものつまづきがみるみる解決する コーディネーション運動』 東根明人監修 明治図書 2007 年

《AMPET 分析協力》

沖縄県立看護大学 宮城政也

【参考資料】 体育における学習意欲検査 (AMPET) の質問項目

【学習ストラテジー】

- 1 自分のよい点や悪い点をよく考えながら運動している。
9 どうすれば、うまくできるのか、あれこれ考えながら運動している。
17 うまくできる方法をよく考えてから、運動するようにしている。
25 体育の時間、上手にできる人のまねをするなど、いろいろ工夫している。
33 先生やうまくできる人のやり方をできるだけまねるようにしている。
41 体育の時間は、うまくできる方法をいろいろと工夫している。
49 運動するときには、できるだけうまい人のやり方をまねるようにしている。
57 うまくできなかった原因をよく考えてから、次の運動をするようにしている。

【困難の克服】

- 2 あれこれと考えるよりも、とにかく何回も練習する方だ。
10 運動が上手になるためには、何回もくり返し練習する。
18 苦しい練習でも、うまくなるのなら、がんばることができる。
26 苦手な運動でも、うまくなろうと一っしょうけんめい努力する。
34 運動がうまくできるように、人よりもいっぱい練習をしている。
42 たとえ運動がうまくできなかったとしても、あきらめずに最後までがんばっている。
50 うまくなるために必要なら、きびしい練習にもたえることができる。
58 運動がうまくできるまで、ねばり強くコツコツと努力する方である。

【学習の規範的態度】

- 3 体育の時間、決められたことをきちんとまじめに練習している。
11 上手に教えてくれる人のいうことはきちんとまじめにきくことができる。
19 みんなで決めたことはきちんと守って運動している。
27 先生や指導者の話をしっかり聞いている。

AMPET の得点化

★各項目の得点化

- 「よくあてはまる」……………5 点
「ややあてはまる」……………4 点
「どちらともいえない」……………3 点
「あまりあてはまらない」……………2 点
「ほとんどあてはまらない」……………1 点

★各下位尺度の得点化

該当する 8 項目の合計点

【意欲的側面】

学習ストラテジー
困難の克服
学習の規範的態度
運動の有能感
学習の価値
計 40 項目の合計点

【回避的側面】

緊張不安
失敗不安
計 16 項目の合計点

☆ 8,16,24,32,40,48,56,64 の虚構尺度は省いています。

- 35 体育の授業は、人よりもまじめにうけている方である。
43 先生や指導者の注意は、素直に聞いている。
51 運動するときにはきまりやルールをきちんと守っている。
59 準備運動をきちんとやってから、運動するようにしている。

【運動の有能感】

- 4 どんな運動でもたいい人より上手にできる方である。
12 人よりもうまく運動ができて、ほめられることが多かった。
20 人よりも運動しんけいがいいと思う。
28 今まで、運動するとすぐに上手になることが多かった。
36 人から「どんなスポーツでもできるね。」と、言われたことがある。
44 ほとんどの運動は、うまくできる自信がある。
52 運動について、人よりもよくできると感じるが多い。
60 自分には、運動がうまくなるそしつがあると思う。

【学習の価値】

- 5 運動が上手にできるということは、とても大切なことだと思う。
13 ふだんから運動がうまくできるようにならないといけないと思っている。
21 運動がうまくできることは、勉強が良くできるのと同じくらい大切である。
29 いっしょうけんめい練習して、運動が上手にできるようにならないといけないと思っている。
37 運動がうまくできるようになれば、将来きっと役に立つと思う。
45 運動するならば、上手にならなければならないと思っている。
53 体育は他の教科と同じくらい大切なものである。
61 人よりも上手に運動できるようになれば、これからもプラスになることが多いと思う。

【緊張性不安】

- 6 人の前で運動するときは、まわりが気になってうまくできなくなる。
14 人に見られていると、すぐにきんちょうして思うように運動できない。
22 自分の得意な運動でも、人に見られていると、実力が出せない。
30 人が見ていると、心臓がドキドキしてうまく運動できない。
38 みんなの前で運動するときは、すぐにあがってしまう方である。
46 運動するときは、人よりも、きんちょうしやすい方だと思う。
54 大勢の人が見ていると、体がきんちょうして、いつものプレーができなくなってしまう。
62 大勢のまえで運動することは、苦手な方である。

【失敗不安】

- 7 運動する時、前に失敗したこと思い出して不安になる。
15 うまくできた時よりも、うまくできなかった時のことをすぐに考えてしまう。
23 相手と競争する時、走る前から負けたときのことを心配してしまう。
31 先生に教えてもらったことが、うまくできるかどうか心配である。
39 失敗することや負けることが気になるので、試合や競争はあまりやりたいとは思わない。
47 試合中に1度でも失敗すると、すぐにだれかと交代してほしい気持ちになる。
55 運動会で走るとき、負けるのではないかと心配で、その場をにげだしたくなることもある。
63 運動するとなると、ミスすることを心配して、ぐずぐずすることがある。

『期待・感情モデルによる 体育における学習意欲の喚起に関する研究』 西田 保 著 杏林書院 2004 年より

※記載に関しては株式会社杏林書院の許可を得ています。